

Top Interview

— 変革に挑む —

まとめ/堀水潤一 撮影/住吉健介

「保育の聖徳」は 今後も人間教育を柱とした 「女性」大学として進化していきます

「わゆるユニバーサルアクセスの時代に入り、誰もが高等教育を享受できるようになりました。ただし、これと「大学全入」を短絡的に結びつける風潮に、私は疑問を感じています。全入とは、「せめて大学くらいは」という考えのもと、確固たる考えもなく、いわば惰性で入りやすい大学に入学すること。これに対して、ユニバーサルアクセスとは、自分が求めるキャリアに向けて最初のステップを踏みだそうとするとき、求める人が、自由に学びに接することができるという能動的な概念です。その意味で、ユニバーサルアクセスの時代だからこそ、高校の先生方においては、いっそう偏差値輪切りの指導ではなく、生徒個々の適性にあわせた指導を期待しています。

若者は可能性の塊です。けれど、なかには、自分のもつ可能性を閉ざしたり、興味の方角を二方向に固定したりしている場合もあるでしょう。保護者や先生方には、「あなたにはこれに向いている」「この大学なら入れる」と、若者の可能性を狭めることなく、後押しをしてほしいのです。そばにいる大人にはその子のもっている能力を広げる責任があると思います。本学園は、「保育の聖徳」という実績を打ち出し、今ではその印象が確立していることを感じています。1990年に聖徳大学を開学し、文系総合大学としての歩みを始めましたが、創立以来の自分たちの立ち位置はぶれてはいません。いつか「少子化で保育所や、幼稚園は危ない」という根拠のない風評も

ありましたが、保育士や幼稚園教諭は、子どもたちの将来の基盤をつくる大切な仕事です。2012年度新設の心理・福祉学部を含め、本学は今、人の営みと心の成長を中心とした大学として、さらに進もうとしています。

今の学生には、仲のいい小さなグループを作るいっぽう、大きな集団の中でふるまうことが苦手という傾向があるようです。本学には建学の精神「和」を学び、幅広い教養を身につけることを目的としている「聖徳教育」と名付けたさまざまな活動があります。シリーズコンサート、学外研修や海外研修などを必修としています。これらは学生たちが自分の壁を破っていく貴重な機会となるはずです。

なにより、この5月に逝去した前学長の入学式のごときはが本学の教育を象徴しているでしょう。あいさつの冒頭「隣の人と握手をしよう」と、突然言ったのです。緊張気味だった学生に、心の壁を乗り越えさせようとしたのです。本学の教育はそういうところから始まります。私が育てたいのは、自分の価値観を明確にもち、自らを律しながら生きていく女性。自立する力を育む「女性」大学として今後も成長していきたいと思っています。



聖徳大学
聖徳大学短期大学部
学長
川並弘純

【学長プロフィール】かわなみ ひろずみ ●1963年生まれ。日本大学法学部卒業、日本大学大学院法学研究科博士後期課程単位取得満期退学。2011年5月より現職。学校法人東京聖徳学園理事長、学園長。眞宗大谷派亀甲山光衆寺 住職、全国栄養士養成施設協会理事、私立大学通信教育協会理事ほか。

【大学プロフィール】1933年設立の聖徳家政学院、新宿宿幼稚園を源流に、90年開学。児童学部(児童学科)、人文学部(生涯教育文化学科、女性キャリア学科、英米文化学科、日本文化学科)、人間栄養学部(人間栄養学科)、音楽学部(演奏学科、音楽総合学科)のほか、2012年度に心理・福祉学部(心理学科、社会福祉学科)を新設。